

Program Notes

交響組曲『シェヘラザード』作品35 (N.A.リムスキー＝コルサコフ)

当団がリムスキー＝コルサコフの作品を採り上げるのは、2018年1月の演奏会での『スペイン奇想曲』以来8年ぶりとなる。彼の代表作ともいえるスペイン奇想曲と交響組曲『シェヘラザード』が、1887年から1888年にかけての短期間に集中して作曲されたことは、この時期に彼の作曲に対する意欲が最高潮に達していたと捉えることもできよう。



Nikolai Andreyevich Rimsky-Korsakov
(1844 - 1908)

バラキレフ、キュイ、ムソルグスキー、ボロディンとともにロシア国民楽派の

『五人組』の1人であるリムスキー＝コルサコフは、1844年に誕生。一族には海軍兵が多かったこともあり、彼も12歳のときに海軍兵学校に入学した。音楽との出会いはこの時期とされており、ロシア五人組の1人であるバラキレフに出会い、本格的に音楽の勉強を始めたのも、兵学校在学中の1861年のことである。

そんな彼が残した作品は、交響曲、管弦楽曲、オペラなど多岐にわたっているが、何曲かを除いて演奏頻度が高い曲はそれほど多くはない。しかし、その門下からリヤードフ、グラズノフ、ストラヴィンスキー、プロコフィエフなど数多くの作曲家を輩出していること、未完に終わったボロディンの歌劇『イーゴリ公』を補筆完成させたことなど、彼がロシア音楽に残した功績は計り知れない。

『シェヘラザード』とは、イスラムの説話集である『千夜一夜物語(アラビアンナイト)』に登場する人物である。物語のあらすじは以下の通り。

妻の不貞を知ったペルシャの王シャリアールは激高し、妻を殺めてしまう。女性不信に陥った王は、処女と結婚しては処刑するという愚行を繰り返した。この愚行を止めるべく王と結婚したシェヘラザードは、每晚興味深い

物語を王に読み聞かせていたが、毎回いいところで話を切り、続きを明日に持ち越してしまう。続きが知りたい王はシェヘラザードを処刑することができず、とうとう語りは千一夜に及んだ。その間、王とシェヘラザードの間に3人の子供が生まれ、シェヘラザードは王の正妻となり、シェヘラザードは王の愚行をやめさせることに成功した。

筆者はこのあらすじを原稿に起こしながら、背筋が凍る思いがした。何しろシェヘラザードは幾多の女性を殺めた男と千一夜(単純計算で約2年9か月!)の間、寝食を共にしていたのである! 彼女はどれだけ強心臓の持ち主なんだ! と、あらぬ想像をしてしまう…。

交響組曲『シェヘラザード』は1888年の夏に作曲され、同年10月にサンクトペテルブルクで作曲者自身の指揮で初演されている。曲の特徴としては、ヴァイオリンをはじめとしたいくつかの楽器のソロが効果的に散りばめられていることが挙げられる。これは前年に作曲されたスペイン奇想曲とも共通する作風であり、冒頭で述べた通り、作曲家として脂の乗り切った彼の管弦楽法の特徴が最大限に花開いた傑作とあって差し支えないだろう。

ところで、現在は演奏会のプログラムノートやCDジャケットなどでは各楽章に副題が付されているのが通例だが、実は作曲者自身が最終稿において副題をすべて取り去っている。これは彼が副題を付すことで曲のイメージが狭くなることを恐れ、純粹に音楽を楽しんで自由にイメージを膨らませてもらいたいという意図があったためといわれている。しかし、副題はこの曲を理解する上で何かしらのヒントになるのは間違いないので、ここでも副題とともに曲紹介を進めたい。

第1楽章『海とシンドバッドの船』

いきなり管楽器と弦楽器による『シャリアール王の主題』の強奏から始まる。木管楽器によるハーモニーを経て、ヴァイオリンソロによる『シェヘラザードの主題』が、ハープの伴奏に乗りゆったりと奏でられる。この旋律が全曲に渡って少しずつ形を変えながら何度も登場し、曲全体の屋台骨を形成している。主部は、ヴィオラやチェロによる波を象徴するような旋律に乗った王の主題が主に奏される。最後は弦楽器のピチカートに乗った木管楽器とホルンのハーモニーで楽章を締め、通常はほぼ休みなく2楽章冒頭のシェヘラザードの主題に引き継がれる。

この楽章はその副題通り、千夜一夜物語の中の『船乗りシンドバッドの物語』が元になっているとされ、作曲者の海軍士官時代の航海の経験が存分に生かされているといわれる。

第2楽章『カランダール王子の物語』

カランダールとは、諸国を巡り修行をしていた托鉢(たくはつ)僧のこと。千夜一夜物語には複数の托鉢僧が登場するが、この楽章がどの僧を指しているのかは判然としていない。

冒頭のシェヘラザードの主題に続き、ファゴットがどこか物憂げな『カランダール王子の主題』を奏する。これをオーボエが引き継ぎ、次第にオーケストラ全体へと響きが広がっていくが、突然トロンボーン(2番!)とトランペットが王の怒りとされる雄叫びを上げる。

それが収まると極めてカデンツァ的なクラリネット、ファゴットなどのソロが数多く活躍する。各楽器の特性や可能性を最大限に引き出した、作曲者ならではの作風となっている。

第3楽章『若い王子と王女』

副題の王子と王女が誰のことを指すのかははっきりわかっていないが、カマール・アル・ザマン(新月)王子とブドゥール(満月)王女の恋物語では

ないかと推測されている。

前の2つの楽章と異なり、8分の6拍子の静かでゆったりとした旋律が特徴の曲である。優しげな王子の主題と、ちょっとコミカルで楽しそうな王女の主題が交互に現れ、2人の恋物語を象徴するかのよう構成となっている。

第1・第2楽章とは異なり、曲の冒頭でシェヘラザードの主題は登場しないが、後半にはしっかりと登場し、最後には木管楽器が交互に王女の主題の変奏のような旋律を奏し、この楽章を終える。

第4楽章『バグダッドの祭り・海・船は青銅の騎士のある岩で難破・終曲』

『青銅の騎士の物語』は『シンドバッド』とともに有名なもので、『荷担ぎ人足と乙女たちの物語』に出てくる話。

航海する船が青銅の騎士像の立つ岩に近づくと、ことごとく吸い寄せられて難破するという物語である。

再び曲は激しさを増す。冒頭のシャリアール王の主題とシェヘラザードの主題を経て、『バグダッドの祭りの主題』がフルートにより奏される。途中で王女の主題を挟みながらバグダッドの祭りは次第に激しさを増し、極めて細かいタンギングを管楽器に多用した目まぐるしい展開を見せる。バグダッドの踊りが最高

潮に達したところで突然トロンボーンが王の主題を強奏して大荒れの海を表現、これにトランペットが加勢し、タムタムの一撃をもって船は難破する。その後海は急に静けさを取り戻し、曲中最後の登場となるシェヘラザードの主題の後に低弦楽器による王の主題が弱奏され、シェヘラザードとシャリアール王が完全にわかりあえたかのような雰囲気のもとで静かに曲を終える。

(ファゴット 外岡 誠二)

交響曲第1番 二長調 (G.マーラー)

曲目解説に先立って、この曲の生い立ちからお話したい。よく比較されるブルックナーに比べ、マーラーは楽譜の版の違いが取り沙汰されることは少ないが、本作品は例外的に幾つもの版が存在するからである。

マーラーによる最初の交響曲であるこの作品は、ハンガリー歌劇場の音楽監督であった1888年11月に完成し、翌89年11月20日に全5楽章版の「2部から成る交響詩」としてブダペストで初演された。この初稿の楽譜は、93年にハンブルクで初演された第2稿に

組み入れられたため現存していない。

第2稿は、93年にハンブルクで初演され、翌94年にワイマールで再演された。構成は初稿と同じく2部構成全5楽章であるが、2回の公演を通じて、「交響曲様式による音詩『ティターン(巨人)』」と名付けられ、各楽章にも以下のような標題が付された。

第1部 一 青春の日々より「花の絵」

「果実の絵」「いばらの絵」

第1楽章 春、そして終わることなく！
(序奏は自然の早朝の目覚めを描く)

第2楽章 花の章

第3楽章 順風に帆を上げて

第2部 一 人間喜劇

第4楽章 狩猟者の葬式、カロ風の葬送進行曲

第5楽章 地獄から天国へ！

本作品は、しばしば「巨人」と称されるが、各楽章に標題を持った「ティターン(巨人)」として演奏されたのは、この第2稿による2回の公演のみである。

第3稿は99年にヴァインベルガー社から出版された。この時に「花の章」と名付けられた楽章が削除され、全4楽章の「交響曲」となった。曲全体および各楽章に付された標題は削除され、管弦楽の編成は3管編成から4管編成

に拡大された。違いが顕著なのはホルンであり、4本から7本に増員された。

第3稿で削除された「花の章」について、少々触れてみたい。演奏時間にして6分程のこの楽章は、交響曲から削除された後も独立した作品としてしばしば演奏される。弦楽器による序奏の後にトランペットのソロが甘美な旋律を奏で、聴き手を幻想の世界へ誘うこの小品を、トランペットの名手ギルバート・ジョンソンを擁した往年のオーマンディ指揮／フィラデルフィア管弦楽団が演奏会のアンコールで屢々演奏したのも分かる気がする。ちなみに小生ラッパ吹きです。

この第3稿が、現在出版されている楽譜の基礎となっている。その後、1906年にユニヴェルザール社から決定稿が出版され、67年には同社からエルヴィン・ラッツ監修の全集版(旧版)が、92年には同社からカール・ハインツ・フュッスル監修の新改訂版が出版された。この新改訂版は、それまで一般的に使用されていた全集版のうち、指示が曖昧なところや前後で矛盾しているところを、100カ所以上修正したものである。本日はこの新改訂版の楽譜を使用する。

演奏には以下のような大編成の管弦楽を要する。

フルート4(2,3,4番はピッコロ持替え)
オーボエ4(3番はコールアングレ持替え)
クラリネット4(3,4番はE♭クラリネット持替え、3番はバスクラリネット持替え)
ファゴット3(3番はコントラファゴット持替え)
ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、
バス・チューバ、ティンパニ(2人)、打楽器
(バスドラム、シンバル、トライアングル、
タムタム) ハープ 弦5部



Gustav Mahler (1860 - 1911)

第1楽章: ゆるやかに、引きずるように、自然の音のように～最初はとともゆつたりと 二長調 序奏付きの自由なソナタ形式

かすかに聴こえる弦楽器のフラジオレット(高次倍音を発生させる奏法)による実音Aの持続音で始まる。うっすら

と霧のかかった早朝の森のイメージだろうか。やがて木管楽器により、「A(ラ)→E(ミ)」「F(ファ)→C(ド)」の4度の下降音型が示される。「度」というのは、音と音の間隔のことで、例えば、ラとミの間には、ラ・ソ・ファ・ミの4つの音があるので「4度」となる。この音型は全楽章を通じてたびたび現れる基本動機となる。この基本動機が様々な楽器と音型で示される中で、クラリネットおよび舞台裏のトランペットによるファンファーレ動機やホルンによる息の長いコラールが何度か顔を出す。クラリネットによるカッコウ(これも4度の下降音型)が鳴くと、序奏が終わりチェロによる第1主題に導かれる提示部(反復あり)が始まる。

この第1主題は、この曲に先立って作曲された歌曲集「さすらう若人の歌」の第2曲「朝の野原を歩けば」の引用である。歌詞の内容としては「主人公は自然の中を歩き、鳥の鳴き声や花の美しさに喜びを見出すが、最後は恋人に去られた自分に絶望する」というものであるが、ここで引用されているのは、朝の情景を楽しんでいる1番から3番の部分であり、自分に絶望する4番に相当する部分の引用はない。

しばらくすると弦楽器による第2主題の提示があるが、第1主題の対旋律の

ように扱われるため分かりにくい。鳥のさえずりを思わせる弦楽器と木管楽器のフレーズを交えながら初めてのフォルティッシモを迎え、管楽器によるカッコウが鳴き止むと、冒頭の静寂が戻り展開部となる。

展開部では、カッコウの動機と4度の下降音型である基本動機の後に、日の出を連想させるようなホルンのファンファーレがゆったりと鳴り響く。この後にチェロが奏するフレーズは、以後何度も現れるので覚えておきたい。

フルートによる鳥のさえずりが収まると、今度ははっきりした形で第2主題がバイオリンに現れる。

第1主題と第2主題が次第に短調に向かって展開すると、やがて第4楽章の第1主題が木管楽器により予告される。ここでの予告は第4楽章でのフォルテ中心のニュアンスではなく、浮かんでは消える不安を表しているようである。

トランペットのファンファーレが2回鳴り響くと、再現部へ移行する。再現部は、ホルンとトロンボーンによる力強い日の出のファンファーレから始まる。ここでは、これまでに提示された主題が圧縮された形で現れる。ティンパニによるカッコウ動機を合図に、唐突に第1楽章は終わる。

第2楽章:勢い良く、しかし速すぎずに イ長調 複合三部形式

チェロとコントラバスによる力強い4度「A(ラ)→E(ミ)」の下降音型と、バイオリンとビオラによるオクターブ上昇の動機が繰り返されると、木管楽器による快活な主題が提示される。冒頭の下降動機をホルンがなぞった後に交わされる低音楽器のやり取りの中に、削除された花の章の主題が回想される。

2回目の提示は、オクターブ上昇の動機を木管楽器が、テーマはバイオリンとビオラが担当し、トランペットのデュエットが合いの手を入れる。これが2回繰り返されると、展開部へ移行する。

展開部では、オーボエやクラリネット、ホルンがベルアップすることで、提示部との違いが強調される。転調された部分を経て、チェロとコントラバスに

細分化された下降音型が現れ、冒頭の雰囲気弱音が弱音で再現される。弦楽器の上昇音階を合図に曲想は次第に熱を帯び、トリオへ突入する。

トリオはホルン・ソロで始まる。弦楽器と木管楽器が主体の穏やかなメロディが続き、やはりホルン・ソロによるオクターブの下降音型を合図に再現部が始まる。

再現部では、冒頭の舞曲が縮小された形で力強く現れ、最後は畳みかけるように終わる。

第3楽章:荘重に威厳をもって、引きずることなく 二短調 複合三部形式

この楽章においてマーラーにインスピレーションを与えたと言われているのが、モーリッツ・フォン・シュヴィントのエッチング「狩人の葬列」である。このエッチングの題材は、自分たちの仲間を殺してきた狩人の遺体を嬉々として墓地に運ぶ



モーリッツ・フォン・シュヴィント (Moritz Ludwig von Schwind, 1804-1871)
『狩人の葬列』(Das Begräbnis des Jägers)

森の動物たちを描いた古いおとぎ話で、当時のオーストリアの子供たちには広く知られていたようだ。

ティンパニによる4度「D(レ)→A(ラ)」の下降音型に導かれて、コントラバスソロがフランス民謡「フレール・ジャック」を短調で奏でる。これが第1主題となる。この旋律はカノン(簡単に言うと、「カエルの歌」です)風につき、ファゴット、チェロ、バス・チューバ等の低音楽器を中心に受け継がれていく。途中でオーボエやE♭クラリネットがおどけたようなパッセージを吹くが、これはもう狩人に苦しめられることがなくなったことを喜んでいる動物たちの歓声かもしれない。

葬列が落ち着くと、第2主題がオーボエのデュエットで始まる。これにトランペットのデュエットが応えるが、途中で、バスドラムとシンバル、弦楽器のコル・レーニョ(弓の木の部分で弦を叩く奏法)に伴奏されたE♭クラリネットとファゴットによる場違いな軍楽隊風のパロディが乱入する。もう一度フレール・ジャックが遠くで聴こえると中間部へ移る。

中間部は、「さすらう若人の歌」の第4曲「恋人の青い瞳」の後半部分の引用である。歌詞は「恋人を亡くした主人公が、菩提樹の陰に身を横たえ

て、救済を求める」という内容。ハープとチェロのアルペジオに続いて、バイオリンがソロ旋律を奏でる。中間部最後のフルートによる音型は、引用元の冒頭で、独唱者が曲の題名である「恋人の青い瞳」と歌う部分と同じである。

再現部は提示部の各主題が短縮されて現れる。軍楽隊はここでも乱入する。提示部と大きく異なるのは、トランペットのデュエットによる穏やかな対旋律が追加されているところ。やがて、葬列は遠ざかり、ティンパニの下降音型を中心に、他の打楽器と低音楽器の響きだけが静かに残り、休みなく第4楽章へ突入する。

第4楽章:嵐のように動いて へ短調 自由なソナタ形式

静寂を破るシンバルの強烈な一撃で始まる。すぐにトランペットとトロンボーンによりファンファーレ風の4度の上昇(下降ではない)音型「G(ソ)→C(ド)」が提示される。この上昇音型が、この楽章の第1主題を予告する。なお、ここではGとCの間にA♭(ラ♭)が挟まっていることで短調であることがわかる。

曲の後半にはこれがA(ラ)に代わり長調になる。木管楽器とホルンによる半音階の三連符のパッセージとファンファーレが交互に現れ、その隙間を

激しく上下する音型の弦楽器群が埋める。4度の上昇音型が4度繰り返されると、オーボエ・クラリネット・ホルン・トランペットにより第1主題が現れる。

ここでも弦楽器による激しい音型が緊張感をもたらす。小節ごとにフェルマータ(小休止)を多用する部分を経て、管楽器による半音階の三連符が2回響くと長かった第1主題の提示部が終わる。

第2主題は、バイオリンによる息の長い夢幻的な旋律で始まり、これをビオラとチェロがやさしく受け継ぐ。嵐のように激しい第1主題と対照的なこの甘美な部分は長くは続かず、クラリネットによる第1楽章の4度の下降音型の再現を皮切りに、ホルンによる4度の上昇音型にトランペットが半音階の пассаージュが応答すると、展開部へ移行する。

展開部はトランペットとトロンボーンによる4度の上昇音型で幕を開ける。ここでは、それまでにこの楽章で提示された旋律が様々な形を変えて現れる。例を挙げるなら、ビオラとチェロによる第2主題の後半の優美な主題は、金管楽器によりグロテスクに、また第1主題の対旋律として木管楽器が金切り声を上げていた部分は、オーボエ・クラリネット・ホルンにより落ち

着いた雰囲気で、それぞれ提示される。

やがて、弱音器を付けたトランペットとトロンボーンにより、楽章冒頭の4度の上昇音型が初めてハ長調「G(ソ)→A(ラ)→C(ド)」で現れ、直後の凱旋的な雰囲気が遠慮がちに予告される。

第1主題の対旋律と短調に戻った上昇音型と半音階の三連符 пассаージュが繰り返されると、今度は弱音器を外した金管楽器によるハ長調の上昇音型によるファンファーレが高らかに鳴り響く。

この楽章は、それまで第2主題の提示部を除き、ほとんどが短調で支配されていたため、霧が晴れたような雰囲気(あくまで筆者個人の感想です)のこの部分は、非常に印象的である。

しかし、それで終わらないのがマーラー。一瞬の空白の後に、このハ長調のファンファーレをニ長調に強引に転調してしまう。ニ長調といえば、バッハの数多の宗教曲、ヘンデルの「王宮の花火の音楽」、そしてベートーヴェンの交響曲第9番「合唱付き」の第4楽章などがあり、いずれも「栄光」「歓喜」「勝利」等のキーワードと無縁ではあるまい。

ちなみに、マーラーはこの部分を非常に気に入っていて、「この交響曲全体で優れた部分があるとすれば、ここである」

と語っていたとか。

やがて、4度の下降音型に基づく第1楽章の序奏の主題をホルン全員が力強く吹き鳴らすと、曲想は徐々に収束し、第1楽章の序奏が再現される。

弦楽器による持続音の中で、4度の下降音型はもとより、遠くから聞こえるファンファーレやカッコウ動機、フルートによるさえずりやファゴットによる(第1楽章の)第1主題の断片も顔を出す。

ただし、ここが第4楽章であることを思い出させるかのように、半音階の動機や第2主題の断片も見え隠れする。第1楽章の面影が遠ざかると、展開部から再現部へ移行する。

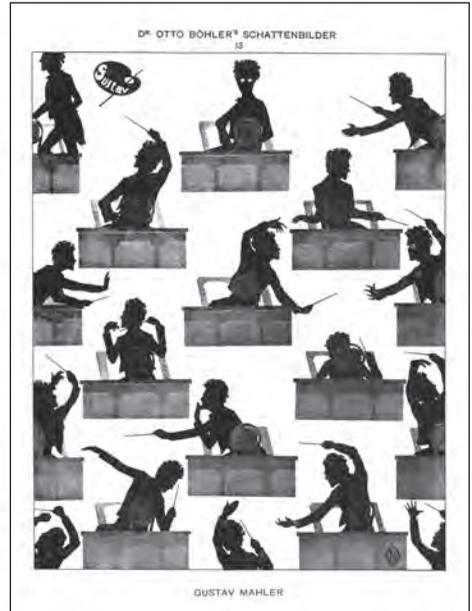
再現部はチェロによる第2主題の再現から始まる。弦楽器と木管楽器を中心に盛り上がりを見せたのち、何かを警告するかのようなビオラの動機が現れる。これは回数を重ねるたびに徐々に広がりを見せ、やがて第1主題の再現の予告であることがわかる。

ソナタ形式において、再現部では主題が順番に再現されるのが通例ではあるが、若きマーラーは、ここで第2主題が先行するという型破りなところを見せる。

第1楽章のトランペットによるファンファーレが2回とも再現されると、曲は

再現部からコーダへ突入する。トランペットとトロンボーンが第1楽章の下降音型による主題を凱旋行進曲のように吹き鳴らすと、これをホルンが引き継ぐ。

ここでマーラーはホルンセクション全員に対して、「すべての音を消してしまうような音量」で「立ち上がって」吹くことを要求している。さらに補強として、トランペットとトロンボーンを1本ずつ加えることも示唆している。やりたい放題である。この凱旋行進曲の主題と第4楽章の第1主題が交錯したのち、圧倒的な迫力で曲が終わる。



オットー・ベラー Otto Bohler による
マーラーの影絵(1914年)
激しい身振りの指揮姿が描かれている

マーラーは生前この曲を15回指揮したと言われている。当時は、録音再生技術はおろか、ラジオの音楽放送もなかった時代。マーラー自身が何度も指揮したとはいえ、聴衆の大半は、この曲を初めて聴いたのではないだろうか。どのように感じたのかを想像してみる。

—*—

客席の照明が暗くなり、オーボエの実音A(ラ)でチューニングが始まる。それが終わると、拍手の中で指揮者が登場。やがて拍手がやむと、指揮者のタクトが静かに振り下ろされる。

「指揮棒は動いているが、何も聴こえないな。いや違う。さっきのチューニングと同じ音が漂っているような気がする。そういえば、弦楽器奏者の弓もゆっくりと動いているし」

こんな状況で聴衆の頭の中に^{ハテナ}「？」マークが充満し、会場がざわざわし始める寸前に、木管楽器のAの音が響く。

「やっぱり、チューニングと同じ音じゃないか。何なんだ。この曲は」

となったところで、木管楽器の音が実音E(ミ)に下がる。

「やっと曲が始まったか」

...

聴衆が受けた衝撃の大きさは、想像に難くない。

これ以外にもマーラーの交響曲の冒頭は実にバラエティに富んでいる。

交響曲第1番

全弦楽器による最弱音の実音A

交響曲第2番

バイオリンとビオラによる激しいトレモロの中を、チェロとコントラバスの音階が突き破る

交響曲第3番

ホルン8本による交響曲第1番(ブラームス作曲)第4楽章第1主題のオマージュ(諸説あります)

交響曲第4番

フルートと鈴のみによる「空から天使が下りてくる情景」(筆者の勝手な想像)

交響曲第5番

葬送行進曲 ソロトランペットによる劇音楽「真夏の夜の夢」(メンデルスゾーン作曲)結婚行進曲のオマージュ(諸説あります)

...

曲全体の評価は、冒頭の印象が大きく左右する。さぞかし知恵を絞ったのであろう。

お陰様で後世の我々は楽しませてもらっています。ありがとう、マーラー。いや、グスタフ。

(トランペット 手塚 晋)